

割近くは、現在免税特典によって外国企業等が集中する州都マナウスに住み、工業・商業関係で生計を立てている。残りは漁業と、ほんの川沿いだけ成立する農業と、生産性の極めて低い牧場である。いずれこれらの人口が工業の環境の変化（ブラジルは一晩でそのような政策の変化があり得る）によって職を失い、森林に出ていったとき、アマゾンの森林はどのようになるのであろう。残された森林をいかに息長く使っていくか、これらを解明するための研究への期待は今まさに高まっている。

図書紹介.....

◎南洋材（新訂増補） 須藤彰司著 A5版 543pp.地球社，東京，1998.12 刊定価 4,500円（税別）

本書は昭和45年（1970年）に出された同名の書の改訂増補版である。当時南洋材の輸入は増加の一途をたどり、樹種やその利用法に関してかなりの混乱が市場に生じていた。それに対処すべく出版されたのが「南洋材」の原版であり、関係方面から大いに重宝がられた。その構成を簡単に述べると、扱われているのはウリノキ科（Alangiaceae）からクマツヅラ科（Verbenaceae）にいたる67科の南洋材で、科の学名のアルファベット順に配列されている。各科の中はさらに学名の属を見出しとし、それに属する樹種の国または地域毎の現地名、属単位の木材の性質及び用途が強度のデータなども含めて記載されている。また随所に木材の顕微鏡写真、樹木や乾燥標本の写真が挿入されている。

さて、今回出された新版の主な改訂点は、まず本文82ページ（参考文献、索引も入れると103ページ）にわたる増補で、旧版当時ほとんど知られていなかったパプアニューギニア、ソロモン、フィジーなどの樹種や早生造林樹種が追加され、また一部の属については新しい知見に基づいた記載が加えられた。次に目立つのは、かなり多くの写真（とくに顕微鏡写真）がよりよいものと新しく入れ替えられていることである。ただし、今回の改訂は元の「南洋材」の印刷原版が利用されたため、増補部分は巻末にまとめられ、写真の入れ替えも元と同じ場所に同大のものが用いられている。近年南洋材の輸入は最盛期（最高は昭和48年の2,250万 m^3 ）にくらべて著しく減少し、平成8年には665万 m^3 となっている。しかし、製品の形での輸入は増加しており、樹種もますます多様化している。その意味から本書は依然として南洋材を扱う者にとって座右の書として欠かせないものと思う。（緒方 健）